

論文内容の要旨

論文提出者	船越知行
論文題目	ラット根未完成臼歯の咬合性外傷における歯周組織障害および歯根形成に関する実験的研究 An Experimental Study of Periodontal Tissue Injury and Root Formation in Immature Rat Molar after Occlusal Trauma
<p>咬合性外傷に関する研究は、歯根完成歯について研究したものがほとんどであり、根未完成歯については、咬合、咀嚼に対する支持力が十分でなく、咬合性外傷が生じ易いことが十分に考えられるものの病理学的研究はほとんどみられない。そこで、3週齢ラットの根未完成臼歯を用い、人為的に上顎第一臼歯咬合面にレジンを築造して咬合を高くした咬合性外傷実験モデルを作製し、対合歯の下顎第一臼歯の歯周組織障害や歯根形成に及ぼす影響について病理組織学のおよび走査電顕的に検索した。</p> <p>その結果、実験群では、歯肉は対照群と比べとくに異常はみられなかったが、術後1日、3日の早期より根間中隔頂部に歯根膜腔の狭小化、歯根膜の硝子変性、壊死が生じ、歯槽骨には経日的に穿下性吸収がみられた。根尖側では、頬側面で薄い象牙質が歯槽骨と近接し、圧迫側が出現するとともに、象牙質が Hertwig 上皮鞘とともに歯髓側へ軽度に弯曲するなど咬合性外傷が出現した。術後5日、1週では、根間中隔頂部の歯根膜は歯槽骨の吸収により回復傾向を示したが、根尖側頬側面では歯根膜の狭窄や融解壊死が生じ、根尖側象牙質は Hertwig 上皮鞘とともに歯髓側や舌側あるいは近心側に弯曲するとともに不規則象牙質が形成されるなど特徴的な咬合性外傷が生じた。根尖部の弯曲は、歯根と歯槽骨の頬側面での近接により Hertwig 上皮鞘の回避現象として舌側や歯髓方向に弯曲したことによるものと思われた。術後2週、4週では歯根の伸長がみられ、象牙質も厚くなり、セメント質の肥厚もみられた。圧迫側では歯根膜の修復がみられたが、根尖部はS字状弯曲が生じ、ときに形態異常など歯根形成に影響がみられた。牽引側は歯根側舌側面に出現したが、全体的に変化は軽度であった。</p> <p>根未完成歯では咬合性外傷が早期より生じやすいことや圧迫側で歯根膜の障害、経日的に Hertwig 上皮鞘とともに歯根の弯曲や形態異常が出現する可能性が示唆され、臨床的にも根未完成歯については、咬合性外傷に対する十分な配慮が必要と考えられた。</p>	